

## 甌島に遺れるマラスルとメーラスル

春日, 政治  
九州帝國大學法文學部國文學研究室教授

<https://doi.org/10.15017/10583>

---

出版情報 : 九大國文學. 2, pp.31-52, 1931-10-05. 九大國文學研究會  
バージョン :  
権利関係 :

# 甌島に遺れるマラスルとメーラスル

春 日 政 治

一

學生上村孝二君が、今春歸郷中其の隣村にマラスルといふ語の今尙話されてゐることを知つて、私に告げてくれた。無論昨年私のした講義の中に、マス（口語の丁寧助動詞）の歴史的變遷に關する事柄のあつたのを聽いてゐたからである。上村君は鹿兒島縣薩摩郡上甌村中甌（上甌島）の人であつて、其の隣村といふのは同島里村のことである。私は思ひがけない貴い資料を得た氣がして、取敢へず大體を調べて貰はうと思つて、同君の夏季休業で歸省しようとした際、其の調査要項を書いて托した。八月下旬に入つて君から報告を受けたが、それによると、里村のみならず、中甌島の平良（行政區劃上、上甌村に屬する）にもこの語が話されてゐて、而もそれが老幼男女一般に亘り用ゐられてゐるといふ事であつた。而して其の意義・形態や實際使用の情況等について大體を知せてくれたので、私は珍重すべきこの言語資料を得て、尠からず悦ばされたのみならず、是非其の生きた語を聞きたいといふ慾望がそゝられて、一度實地に就いて調査したいと思つてゐたが、今夏はとかく差支が多くあつて、出掛けられなかつたのであつたが、

十月中旬數日の餘暇を得た爲に、彼の島に渡つて一わたりこの語の分布情態を調査することが出來た。先づ上村孝二君の發見された功績を特記し、かつ調査の端緒を開いてくれたことを感謝しなくてはならない。





甕島は薩摩の西方十五六海里の洋中に在つて、上中下三島を列ねてゐる。行政区劃上三村に別れてゐて、上甕島の東北の一部が里村であるが、里といふ部落が九州本島から渡る口津になつてゐる。上甕島の西南部と中甕島とを合せ上甕村とし、下甕一島が下甕村になつてゐる。私は十月十七日(土)の午後上甕島の里村に上陸して、其の地の調査をして一泊、翌十八日(日)に里を發して島の北海岸に沿うて西方小島をしまを訪ひ、それから南方中甕(上村君の郷里)に出て、船で中甕島の平良に渡り、更に船の便を借りて下甕島の北端蘭幸田に上陸一泊、翌廿九日(月)朝其の地の調査を遂げた後、舟を傭つて南方長濱に渡り、それより陸路青瀬に出で、更に山を踰えて島の南端手打に出て泊つた。

甕島に遺れるマラヌルとメーラスル

二十日(火)手打の調査を了つて廿一日(水)朝彼の地を出船、串木野に上つて夜晩く歸福した。前後島に在ること四日間、訪づれた部落が都合八つであつた。三島内で行かなかつた個處は上甌島の江石・桑ノ浦、下甌島の片野浦・瀬々野浦等であつたが、それらの方言については、力めて其の地出生の人に遇つて、概略ながら之を聞くことが出来た。只桑ノ浦の事だけは全然聞く便宜を得なかつたが、これは今後何かの便を以て補ひ得ることと思ふ。私はこの語を調査する爲に、主として各地の小學校を歴訪し、生粹の其の地産れの教師の方々に聞く方法を取つた。教師の人の口が方言からはやく不醇になつてゐることは知らないでもないが、未知の土地に初めて渡つて探訪する私としては、凡てに亘つて之が最も便利であつたからである。従つて採集したものがさうした不醇も混じようし、第一餘り落着いた旅行でなかつたから、必ずや誤聞誤記もあらう、又後から見ると、聞洩した點も少からずあつたが、先づ大體は調査し得たと思ふから、私が三島に亘つて記し取つて來たものを、上村君から貰つた報告(里村と平良との)に併せて、其の大體を書いて見ようと思ふ。

## 二

三島を通じて、人に物を與へることを表す動詞に、ヤル・クルル若しくは其の音韻的變訛のヤイ・クルイが最も普通に行はれてゐ、而もそれが、自己・授受全く同様に混用されてゐる。それから上ゲルとか差上ゲルとかいふ謙讓語には、ヤリモス・ヤイモス・クレモス・アゲル・アグイ・アグツ・アゲモス(モスはモースと長く言ふ處もある)などが用ゐられてゐるが、この他に、マラスル・メーラスル若しくは其の變訛音の形が行はれてゐる。私の調査の中心

は其のマラスルやメーラスル等に在るのである。

上甌島の里村は最も北に在つて、而も島中第一の大部落であるが、こゝが二つに別れてゐる。北の士族の部落と南の平民の部落とが是である。この二つの部落は言語が自ら異つてゐるのであつて、其の士族の方には用ゐられないが、平民の方にはマラスイ(終止形)といふ語が使用されてゐる。マラスイは言ふまでもなくマラスルが島獨特の音韻變化をしたものである。ルがイと變ずることは、子音の變化と母音の變化とを混じたものであつて、即ちこの島に於けるラ行(ɾ)音のヤ行(j)音化することと、ウ(u)音のイ(i)音化することとの重複したものである。其の結果、前述のヤイ(ヤル)・クルイ(クルル)・アグイ(アグル)などは勿論、

家 鴨           アヒル——アヒー。

釣 瓶           ツルベ——ツイベ。

箆               ザル——ザイ。

野 蒜           ノビル——ノーパー。

輕 業           カルワザ——カイアザ。

などの例を多く見ることによつて、この音韻變化の傾向がわかるであらう。(因みに本稿の音韻に關しては、國學院雜誌昭和六年一月號二月號に連載された宮良當壯氏の「甌島方言の音韻に就いて」を参考したことが多い。)

この語は上ゲルとか差上ゲルとかいふ給與の謙讓動詞であつて、

こいはマラスリヤよろこばよう。(之を上げれば喜ばれるだらう。)

甌島に遺れるマラスルとメーラスル

こいはあぎやーマラスイ。(之を貴方に上げる。)

とやうに用ゐるのみならず、亦

寫眞ばもろーてマラスラー。(寫眞を貰つて上げよう。)

わしもしてマラスーか。(私もして上げようか。)

などの如く、助動詞やうに用ゐられる。しかし、之を丁寧助動詞マスの位置には用ゐられないやうである。換言すればこの語の意義はマキラスルの原意に止まつてゐるやうである。

三島を通じて以下述べようと思ふマラスルやメーラスル等の意義用法は、すべて右の里村に於けるやうであつて、皆同様であるから、以下一々繰返す煩を避けようと思ふ。因みに丁寧助動詞マスの位置には、全島モス又はモースを用ゐることは、鹿兒島方言と一般であるから、之も反覆することを省かうと思ふ。只マラスルやメーラスルなどの助動詞やうの用法には助詞に直接する場合と、助詞テを以て接続する場合との別が、地方によつて違ふから注意を要する。里村に於けるこの接続法は、シテマラスイといふやうに、必ずテの助詞を伴ふことになつてゐる。

さてこの語の使用範囲であるが、部落の内でも現今は若年の人に漸次用ゐられなくなつて、老人間、殊に五十歳以上の婦人に多く行はれてゐるといふ話である。しかし二十五六歳の教師の人が、自分等も以前には使用したといふから、漸次其の使用範囲の狭少になつて行く傾向も見ることが出来る。而して其の活用形は大體左の如くである。

こいはマラスー。(之を上げよう。)

こいはばーさんマラセンて。(之をお婆さんに上げなすか。)

じやーこんば二三ほんマラセた。(大根を二三本上げた。)

あいはばーさんにかせマラセて來た。(あれをお婆さんに上げて來た。)

こいはあぎやーマラスイ。(之を貴方に上げる。)

あいはマラスイみやー。(あれは上げまい。)

マラスイもんのなか。(上げる物がな。)

こいはばーさんにマラスリヤよか。(之をお婆さんに上げればよい。)

こいはばーさんにかせマラセー。(之をお婆さんに食はせて上げる。)

以上を要約すると、大體下二段活用であつて、

ス<sup>セ</sup> ス<sup>セ</sup> スイ スイ スレ(スリヤ) セー (第一段のセは否定形、スは未來形、以下準之)

の如くであるが、未來形にマラシヨ(セウ)といふ形が用ゐられないで、マラスーといふ變訛音の形が用ゐられる。動詞にウの接續する未來形は、(下段括弧内は否定形)

行カウ (行カン)

起キラウ (起キラン)

受クウ (受ケン)

見ラウ (見ラン)

蹴ラウ (蹴ラン)

飯島に遣れるマラスルとメーラスル



來<sup>ク</sup>ウ

(來<sup>ケ</sup>ン)

勉強<sup>ク</sup>スウ

(勉強<sup>セ</sup>ン)

などのやうに、受クウ・來<sup>ク</sup>ウ・勉強<sup>ク</sup>スウといふ形があつてウ列音に變化してゐる。殊に下二段やサ變の活用語が上の如き形を取つてゐるので、このマラスウも之に準じたものであらう。オ列拗長音がウ列直長音に變ずることは他の語にも見出し得る所で、

芭 蕉

バシヨ――バサー

夫 婦

ミョ―ト―ムト

などは其の例である。このウの接續する未來形には、他の地方に於ても、殆どシヨ―(セウ)といふ形が見出されないのであつて、島の方言の特徴である如く見える、さてこの未來形と同様の用法に、マラスラー(上げよう)といふ形がある。之も動詞にはすべて行はれてゐる形であつて、

行<sup>カ</sup>ー

起<sup>キ</sup>ラー

受<sup>ク</sup>ラー

見<sup>ミ</sup>ラー

蹴<sup>ク</sup>ラー

來<sup>ク</sup>ラー

## 勉強スラー

の如くである。上村君の説によると、前掲のウ接続の形は確實な意志を表し、後者（右の）は行カウ・來ヨウの外に行クトヨ・來ルコトヨといふ意味をも表すといふことである。因つて思ふに此の形は標準語の行クワ・來ルワといふ語形と同じものらしく、マラスラーはマラスルといふ連體形にワの如き感歎助詞の加つたものではないかと思ふ。マラスの文語終止形にラムの接続したものかとも思つたが、四段活用動詞の行カーになつてゐるのを見ると、上述のやうに解するのが妥當であると思ふ。このラー未然形は他の地方にも行はれてゐるやうである。

次に中甌島の平良では里村と同じくマラスル系を用ゐてゐるが、其の終止形は多くの人の言ふ所を綜合すると、マラスルともマラスイとも又はマラスツとも言ふやうである。又助動詞やうの用法にも、

歌ばうとてきかせマラスーか。

おいもしてマラスル。（私もして上げる。）

などの如く、動詞に直接するのと、助詞テを取るのと兩用あるやうである。而して使用範圍は里村に比して更に一般的であつて、士族平民の別なく、上は老人より無論男女を問はず、小學校の兒童までも常用してゐるといふ事である。活用形を検すると、

マラセンか。

マラスーい。

マラセた。マラシた。

甌島に遺れるマラスルとノーラスル

マラせて來た。マラシて。

マラスル。マラスイ。

マラスイみゃー。(上げまゐ。)

マラスイばつて。

マラスルか。

マラスイもん。

マラスレばよか。

マラセー。マラセヨ。

などであつて、

ス	セ	スル	スル	スレ	セヨ
シ	セ	スル	スレ		
		スイ	スレ		
					セト

比較的正しく下二段活用を保つてゐながら、一方に里と同様訛音の形が行はれ、而も連體のシになりかけてゐることは、里に比して注意すべき點である。即ちサ行變格になりかけてゐることは、桃山時代のマラスルがサ變になり了つたのと同過程に向つてゐる。尙茲に注意すべきは終止形をマラスツと言つて殆どルを落した形の存することである。これは手打に於て平良生れの川畑里志君から聞いた所であるが、同君が特に注意して話してくれたので實存する形であることは確實である。之がマスのマスとなるのによく似てゐて、後に述べようと思ふメーラスル系の方にも地方

によつてこの現象が見えてゐるのである。上村君の記してくれた平良での例の中に、

烏賊なつとべつたい取つて來れば、二度と沖にややいマラセンとば。(烏賊なりと澤山取つて來れば、二度と沖には遣り申さんのに。)

といふのがあつて、この場合のマラスルは單に謙讓の意味を表してゐるやうに見えるのである。他の地方にクレメラスルといふ用法があつて、之に似てゐるが、或場合にはかうした使用法もあると見える。しかし私の聞いた範圍では、マラスルにもメーラスルにも普通この用法がないといふことであつた。

以上は三島内に於てマラスル系の遺存する只二つの部落であつて、上村君の調査してくれたのが、丁度このマラスル系の個處のみであつたが、其の他の地方は皆メーラスル系を使用するものである。

### 三

上蘆島の西部に小島・瀬上といふ二つの部落が相隣してあるが、其處ではメーヤスイ(終止形)といふ語が用ゐられてゐる。メーヤスイはマイラスルの音韻變訛から生じた形である。マイのメーとなるのは——即ち二重母音アイのエーとなるのは——此の島の最も廣い範圍に行はれる語音現象であつて、

大 工           ダイク——デーク

買 物           カイモノ——ケーモン

平 良           タイラ——テーラ

飯島に遣れるマラスルとメーラスル

泣いた ナイター——ネータ

などの如きが是である。ラのヤとなるものは、已述のラ行（r）音のヤ行（j）音化であつて、スルのスイとなるのは、已に里村・平良等のマラスイにも存した所である。

この語はこの部落でも已に若い人々には用ゐられないで、老人の間に遺存してゐるやうである。實は私がこの調査の爲に訪問した小島の神山吉亟氏（二十八歳）がこの語の存在を全く知らないで、上ゲルといふ謙讓語にはアゲモスとかヤイモスとかいふより外ないと話されたので、私がやゝ失望してゐた際、瀬上出身の同夫人が傍から、瀬上でも小島でも老年の人の間にはメーヤスイといふ語の行はれてゐることを談つてくれたので、私がそれよと期待して來た獲物を見出したやうに嬉しかつた程で、この情態では恐らく小學兒童などは使はない言葉となつてゐるのだらう。

この語をこの部落で助動詞のやうに使用することは有無不明であるが、神山氏夫人の言ふ所では、自分は知らないと言ふ事であつた。活用形は、

こいばメーヤせんか。

こいばメーヤスーか。

あいばメーヤせた。

こいばメーヤスイ。

メーヤスイものなか。

こいばメーヤスエばよか。

こいばメトヤセー。

といふ如くであつて、

スセ      セ      スイ      スイ      スエ      セー

の活用法をもつてゐる。此の地方の特徴はラ行音を全く避けて了つてゐる事であつて、メーヤスイのヤは他地方に例のない事であるし、メーヤスエのエなども、他に一個處同例があるが、稀なものである。つまりマラスルがラ行音を脱落してマスとなつて了ふ中間階段を見せてゐるとも見えて、頗る興味の深いものである。元來この小島・瀬上地方は島中でも大分言葉に異色をもつてゐる所であることを、里村・中甌其の他の部落の人が言つてゐるのであるが、このメーヤスイといふ形は、此の地より外には何處にもないのである。

要するに、上甌島にはマラスル系を用ゐる地方が北東の里村の一部にあつて、メーラスル系を使ふ地方が西北の瀬上・小島にある。(桑ノ浦の事を遂に聞く便宜を得なかつたことは已述の如くである。)而して南部の中甌や江石には其の何れもが使はれてゐない。さて中甌島唯一の部落たる平良はマラスル系であるといふ事になる。

次は下甌島であるが、この島の主要なる部落は東海岸に北から蘭牟田・長濱・青瀬(瀬尾を含む)があり、南端に手打があり、西海岸に北から瀬々野浦・片野浦等があつて、總べてメーラスル系に屬してゐる。(内川内のことは聞く便宜がなかつた。)

蘭牟田はメラスルを用ゐる。メーの長音が短音化してゐるが、形は比較的崩れないで保たれてゐる。

メラシヨ一(せう)

メラせんか。

メラセた。メラシた。

メラせて。メラシて。

メラスル。メラスイ。

メラスルもん。メラスイばつて。

メラスレば。

メラセ一。

であつて、

セ	シ	スル	スル	スレ	セ一
シ	スイ	スル	スイ		

下二段活用を存してはゐるが、平良のマラスルのやうに連用がシになりかけ、終止・連體のスイといふ形は、已に上中二島のマラスルにもメーラスルにもあつたものである。この語を助動詞やうに使用することはないといふ話であつたが、之は或はあるのではないかといふ疑がある。使用者は多く大人であるといふ事であつた。尙私の書取つたものに未來形のセウがあつたので、其の儘こゝに掲げてはおいしたが、之は再調査の必要あるものと疑を存しておく。未來形シヨ一(セウ)は三島中何處にも用ゐられてゐないからである。

長濱はメースルといふ語を用ゐる。即ちラが全く脱落して了つてゐる。助動詞やうに使用するには必ず助詞テを入れて、シテメースルといふ。使用範圍は關牟田と同じく主として大人であるといふ。活用は

メーせん。

メーシう。

メーシた。メーシて。

メースル。(メーフー)

メースルばつて。

メースレば。メースリヤー。

メーセー。

であつて、

シセ  
シ スル スル スレ セー

連用はシになりましたつて、其のシが未然まで冒してゐる。終止形にメーフーといふ訛りがあることをも聞いた。こゝではサ行音のハ行音化することが、京阪地方のその様であることは宮良氏も指摘された所であつて、シタ(舌)をヒタといひ、ソレ(其)をホイなどいふ例が見える。メーフーも正に其の類であらう。とにかく本土に於けるマラスルがマスルに進んだ階段を、このメーラスル對メースルに於て見ることが出来るし、一面彼のマイルスとも酷似してゐ



る形であつて、マイスルのマイを地方的にメーと訛つてゐるまでである。

青瀬地方はほど長濱と同様であるが、助動詞やうの用法も無論存して、

教へメーセー。(教へて上げよ。)

貸しメースル。(貸して上げる。)

などの如く、助動詞を借らずに直接し、尙

くれメースル。(上げる。)

といふ給與の語を重複した形もあることを聞いた。この形は南方には行はれてゐると見えて、後の手打の巡田(メグンダ)にあるやうにも聞いた。かうした形は給與の義が動詞クレに置かれて、メースルが單に謙讓の意味だけになるのであるが、是等の例を前述の平良に於ける

二度と沖にややいマラセンとば。

のマラスルの用法と合せ考へると、已に助動詞やうに置かれた或物には單に謙讓語だけに使用されてゐるものが發生しかけてゐることを認めなくてはならない。

使用範圍は老若男女を問はず一般に亘つてゐるやうであつて、活用は、

メーセンで。

メーセた。メーシた。

メースル。

メースルもん。メースルばつて。

メースレば。

メーセー。

未來形にメースラーといふ形があるやうであるが、メースもメーシウもないやうに聞いた。連用はセ・シ兩用で、彼は長濱とは小異があつて、大體は

セ　セ　スル　スル　スレ　セー

となるのである。

手打は「甌島の南端に在つて、三島中最も大きな部落であり、村役場も置かれてある首邑である。部落は濱・麓・巡田の三つに別れてゐて、言語も各特色があるさうである。其の内濱は漁業・商業の部分でメーラシー若しくはメーラシーを用ゐてゐる。助動詞やうの用法には動詞直接の形も、助詞テを介する形もあるやうである。

教へメーラセー。(教へて上げよ。)

貸してメーラシウ。(貸して上げよう。)

使用者は大人老人で若年の者にはないといふ。活用形は

メーラセン。

メーラスー。メーラシウ。

メーラシた。メーラシて。

甌島に遺れるマラスルとメーラスル

メーラスー。メーラシー。

メーラスーごとあい。

メーラシーもなあなか。

メーラシエば。

メーラセー。

であつて、他地方と大分違つてゐる。

セ  
スシ シ スー スー シエ セー  
スシ シ シー シー シエ セー

この活用に於て注意されるのは、シ形の榮えてゐることであつて、連用がシになり了つて、それが未然にも終止・連體にも已然にも表はれてゐて、セヤスも存してはゐるが殆どシのみで事足る形を取つてゐる。又スーの終止形もラ行音のヤ行音化であつて、他のスイと異ふ形であるし、已然のシエも、小島のスエに準すべきヤ行音化である。

麓はメースルを用ゐてラの脱落形である。助動詞やうの用法には助詞テを取らないといふことである。

教へメーセンか。(教へて上げぬか。)

一般に行はれてはゐるが、子供は餘り使用しないやうになつてゐる。

メーセンか。

メースー。

メーシた。メーシて。

メースル。

メースルばつて。

メースレば。

メーセー。

サ行變格に活用して、只未來形にメースーがあるのは他の地方と同様である。

ス　セ  
ス　シ　スル　スル　スレ　セー

巡田に於ては大體前二者を併用してゐるさうであるが、老人がメーラスルの長い形を、若年の人がメースルの短い形を用ゐるといふことである。こゝにもクレメーラスル・クレメースルといふ形のあることを聞いた。活用などの委細に就ては遺憾ながら聞く便宜を得なかつた。瀬々野浦ではメーラスルを用ゐて、助動詞やうの用法には助詞テを介せず、動詞に直接し、使用範圍は老若男女一般に亘つてゐるといふことである。活用も未來形にスーがあるのみで殆ど正しく下二段に保たれてゐるやうである。片野浦は濱田と岡とに別れてゐて、濱田の方ではメーラスルを用ゐ、岡の方ではメースルを用ゐてゐるさうである。而も兩方ともルを失ひかけてゐて、活用が四段化する傾向が見えてゐる。岡の方の語として談つてくれた形は、

メーせん。

飯島に遺れるマラスルとメーラスル

メーシタ。メーシテ。

メースで。

メースとがなか。

メーセば。

メーセー。

セ シ ス ス セ セー

などであつて、その一斑を窺ふことが出来よう。濱田の方も、連用がシになつてゐて、終止・連體に殆どルを落して了ふさうである。

#### 四

以上を概括すると、上中下甌島を通じて、マラスル系を使用する所が里村と平良とであつて、何れをも用ゐない中甌と江石とを除いて、他は全部メーラスル系に屬してゐる。さてこのマラスルとメーラスルの分布が如何なる起源を有するか、又本土に於けるマラスルと如何なる關係に立つかは、容易には斷案を下し難い。先づこの二つの形が共にマイラスル（マキラスル）より來たことは言ふまでもないが、島内に於ける音韻變化の地方的差異と見る解釋もあらう。アイの二重母音が島の南部ではエーとなるが、北部ではヤーとなることは宮良氏の調査に表はれてゐる所であつて、同じマイラスルも、

ミヤーラスル（北部）

## メーラスル（南部）

といふ二つの形に分れ得る。南部のメーラスルの成立はかく説明して誤りはないと思ふが、北部の方もミャーラスルが直音化してメーラスルとなり、更に短音化してマラスルとなつたものと見られないではない。しかし、現在のマラスルはマが明かな直音而も短音であつて、さうした變化を取つた跡を討ねることは甚だ困難であるし、かつ本土に會て存在したマラスルに餘りに似通つてゐる。かくてマラスルが本土に於けるマラスルと關係してゐると見る解釋が成立し得る。

三島を通じて觀ると、メーラスルといふ語が其の大部分の範圍を占めてゐて、之がこの島に於けるマイラスルの一般的變訛の形と見ることが出来る。（或は九州本島で早く已に成立つてゐた形かとも思はれる。）さうすると、マラスルが極めて一部に行はれ、而も比較的島の入口の地方に分布してゐるなどから考へて、如何なる機會からか、マラスルが九州本島或は其の他からこの一部に渡つたものではなからうか。かうした考察は更に多分に島の歴史的若しくは文化的背景を必要とするものであるが、私の研究は未だそれまでに至つてゐないから、茲には只この假設的愚案を試みるに止めておく。

さてこれらの語の意味は、給與の謙讓動詞であつて、上ゲルとか差上ゲルとかいふ意義をもち、又動詞に直接し若しくは助詞テを介して接續して、同義の助動詞やうに用ゐられる。この助動詞やうの或用法には單に謙讓の義に用ゐられる場合も見られるが、まだ丁寧助動詞、マスの意義までには成下つてはゐないのである。要するに抄物に於けるマラスルと同程度に止まつてゐて、吉利支丹文學や狂言詞などの程度までにはなつてゐない。この點に於てこの島に於

ける此の語は足利中期のマラスルを存してゐると言つてよい。次に形態であるが、マラスルの方は運用がセと共にシを生じてゐて、下二段からサ變になる過渡期に在つて、抄物と吉利支丹文學との間にある古さである。メーラスルの方は地方によつて種々の變化をしてゐるが、

メーラスル(瀬々野浦) メラスル(蘭牟田)

メーラスル(手打の濱)

メーヤスイ(小島・瀬上) メヤスイ(蘭牟田)

メースル(長濱・青瀬・手打の麓)

メース(片野浦)

などを陳ねて見ると、漸次簡單化して行き、従つて活用の下二段からサ行變格、更に四段化の傾向を取り行く各階段が、位置的には錯綜しながらも三島の内に見られ、以てマスの形態變化の経路を考へるに資するに足つて興味あるものである。最後にマラスルもメーラスルも乃至メースルも、或部落では今尙老若男女一般に使用されてゐるが、何れかと言へば、已に廢語になりかけてゐて、漸次使用されない運命に置かれてゐるものと見なくてはならない。中甕や江石などにも會ては何れかが行はれてゐたものと考へられるが、今は全く其の跡を絶つてゐるものである。

終に彼の地に於ける方々の懇切なる材料提供を謝すると共に、之を初稿として更にそれらの方々の訂正増補を待つて、再稿稿三の機あるべき豫期の下に草したものであることを斷つておく。